

遊戲菩提記

特43

848

東 京 圖 書 館

四 二 函

新 門

六 架

七 部

號

類

019873-000-4

特43-848

遊戲菩提記

伊東 橋塘 / 編

M14.11

ABG-0705



現傳正士稿

幽歌女音控記

東京文社

特43
848

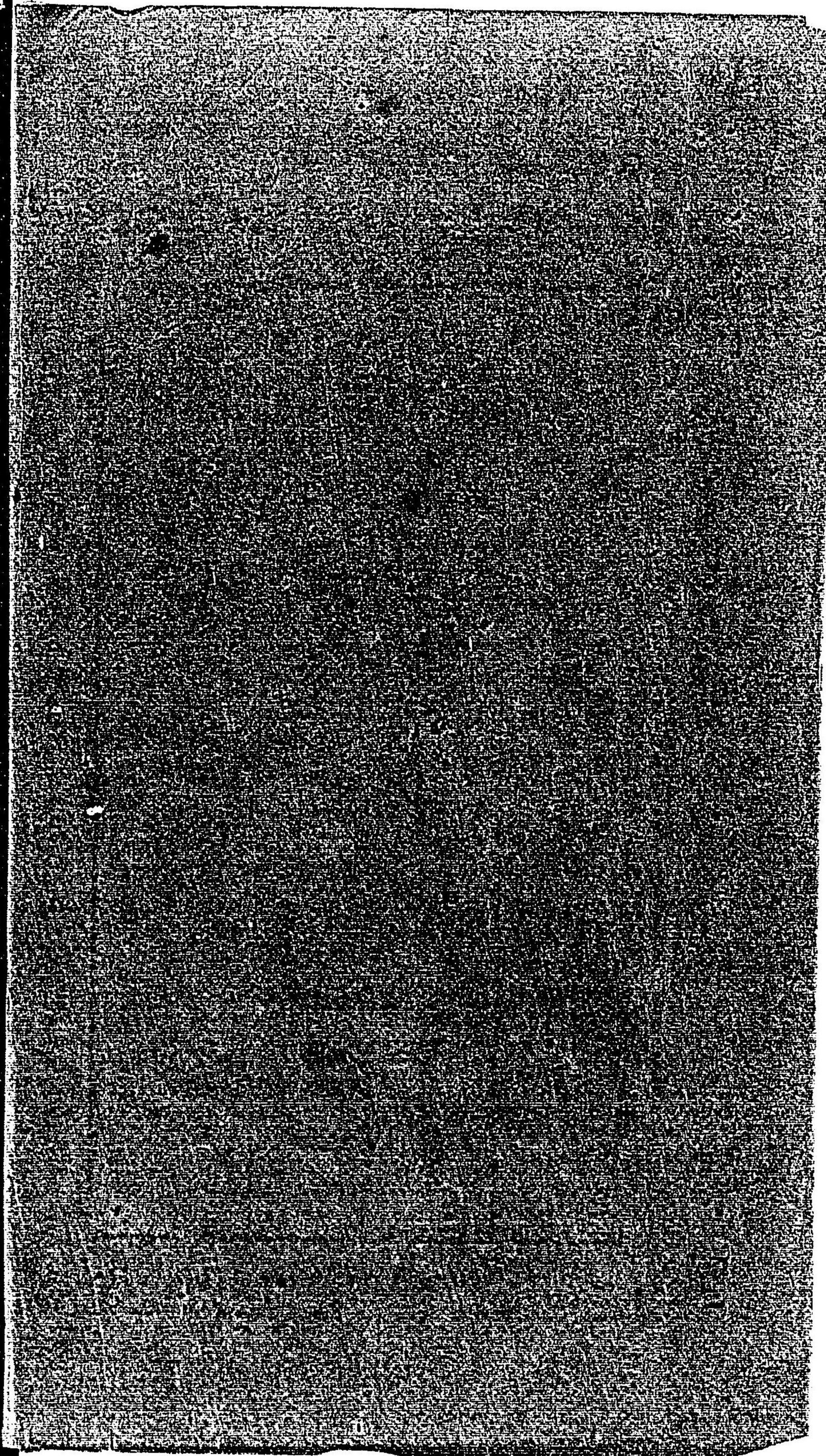
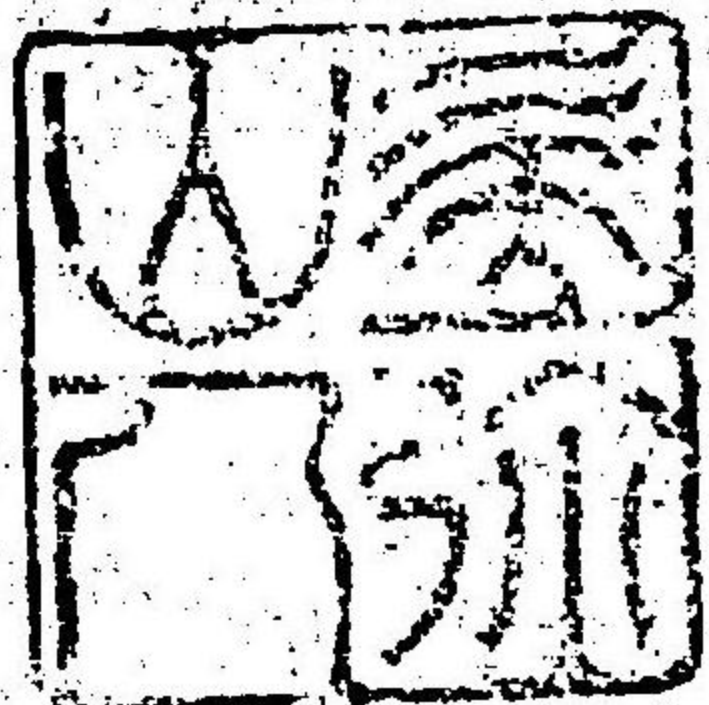
東
書
香
山
朝
海
樓

遊
園

小
樓

藏

書



仮名垣魯文主のとし頃古き佛を好みて自ら玩佛居士と名のり家は數多の佛像を築め
 それを晨夕の樂ひといひせり、さつらへ、あまぐちよ後世をねがひ、丸品の上に産れ
 て、百の味とひを食らんの心の、蓮葉の露をくりもあらずとあんな、されば、かゝるみや
 びのすさびよりえて、本所ある天恩山五百羅漢寺のいたくわれゆき、法の燈火くげ
 ん人も稀にありよしと深く歎息さ、主の大徳ととりり、同じ心の人々をくりたらひ、堂
 宇を再び建替んの企ある折しも、をぢが、亡父の、大然忌に當れるより、大御代明治
 十四年といふとしの七月廿四日、其靈祭を、同じ寺めて營み、うつ、友達の貯へ持
 たる、古き佛の像古き器とも、くさくつとへて、思ふどちの豫て備そある、遊食會
 といふ事を、該法の席を開けしよ、來りつどふひとひとの、己々隨意、持寄られし品

品の、何れも大乘无上の法味を含み、遊戯三昧の樂ひ、堂にこち、場にあまり、大徳達
 の誦經の聲の物の音にあひて、折は應鐘の調を奏し、肩脱ぐあり、足くむありて、華を
 捻る主、微笑ふ客、俱は色則是空の涼風を招き、浮立つ塵の世の暑さを拂ひ尽したり、
 斯て其日人々の手向の言の葉あど、徒らにちり失あんたわたらしとて、囊に新聞紙よ
 掲載られし禪林叢話をも編入て、後見む人のよすがにものと、櫻木は鏝め一小冊とあし
 遊戯菩提記と号られたり、爰に己も、歌の道の交らひあるまぞ、該圓居に、運りたる、
 されば、親しく見聞しよま、且その故よしを、巻のとしに、書加へよと、をぢの乞ひる
 るまよく、難波のよしやあして書、あしの一葉の一言を、さえみじか死筆の束採て、
 百とね美の國、郡上のこはり、廣とたの八幡の里大の春彦梅雨舞渡る月地橋のた
 もとある、實のやどりよまると

○聞有五百羅漢保存之舉

賦以呈魯文禪兄

撻盆子未定稿

釋迦寂後幾千年無復一人護佛權天下坊主多破戒唯知讀經
 不知禪各地寺院歸零落山門傾斜伽藍頓佛前稀聞木魚響城
 邊偶見線香烟我聞有名羅漢寺亦是近世人所捐五百羅漢像
 已古頭顱手足半不全其他附屬諸佛具皆為真黑塵中填山色
 水光難依舊荒破如此太可憐猫々道人粹道師餘好近向佛道
 遷曾參此寺有所慨欲為住僧謀保存同志協贊議既決願望成
 就可無怨嗚呼道人果何者不似尋常生通達滔々世俗喜眠程
 獨唱佛禮有因緣平生飽筆操利劍濟度魔界多少員

一禪志 遊戯菩提記

東京

假名垣魯文原稿 伊東橋塘輯錄

○五百羅漢禪林叢話

玩佛居士

美觀の國土の光りを増し美術の國民の名譽あり工藝丹精を抽で製作拔群を勝る者
 千歳の下衆庶その物品を崇尊愛敬して不朽の傳ふや獨り我國のみならず世界文明の
 諸國皆然り是亞細亞歐米の交際國の博物館の設置ある所以あり東京府下本所區五の
 橋通り豎川より南方武藏國葛飾郡龜戸村ある天恩山五百大阿羅漢禪寺の黃檗派の禪
 林として河東第一の名藍あり中就其本尊丈六の釋迦佛及び都て五百阿羅漢の佛像の
 當山の一代開基松雲禪師が手彫りして梵相の奇古坐立の威儀儼然として活るが如く
 嘯然として物いふが如く其妙工運慶惠心が昔日の手作と併び敢て耻ざる者の如く然
 るお星霜二百餘年の久しきを經且に近來の住職道徳薄く寄依の信向を疎うらしめ

しを以て現今一山荒廢の形ちを顯し加ふるふ安政二三の震災暴風の難み觸れさしも
 の大伽藍東西の羅漢兩堂奇巧の榮螺堂鐘樓山門天王堂玄關接待所をも悉々破損し
 縋み残る本堂庫裡も爰缺碎け檐傾きて五百の羅漢三千の佛躰悉々風雨ふ犯され尊
 首の離れ胴躰元として合掌全たろろ偶有志の詣人拜觀慘然として慷慨の情止まる
 を知らず記者佛信の心薄しと雖も元來古奇を愛敬の微意あるを以て茲に當山の履歷
 を録し開基の丹精を演以て此名藍

の永存を計ふんとす

天恩山羅漢寺の大祖松雲禪師の元

來西京の人おして始め佛工を職と

し俗稱を九兵衛と呼び慶

安元戊子年の出生あり

幼雅さより奇異非凡正信



參禪の意を保ち自然感徳

する所ろありて寛文九年

己酉大坂難波の端龍寺

お入て當時の活僧鉄眼禪師お隨身し

薙髮して僧とあり其後七八年間九州

地方お遊歴し豊前國(福岡縣下)宇佐の羅漢寺

に至り唐土天台山の逆流併びお賢順の兩僧一

夜お造立せしと傳へし五百羅漢の石像を拜觀し恭敬の餘り争う此像お倣ひ五百の聖

像を手彫せんと奮念茲お發し再び端龍寺お歸省し鉄眼禪師お素志を告ぐるの命あるお

應じ貞享年間江戸より來り牛島弘福寺の鉄牛和尚お便り元祿四辛未年淺草寺境内お

る壽松院に假屋お營み鉄牛和尚の資より第一尊を刻むと雖も時を得ずして寄附多

ろろす翌五壬申年の春淺草御藏前ある十六人の道俗彫刻成就せしめんとて素志を



あは 合せ松雲を補佐するより松雲の法刀ますく 利く同六年癸酉の春五十尊彫刻成れ
り此時補佐の御藏前八十六名

山田屋金右衛門 法名 無的院諦了元真居士 八十九歳

正徳二壬辰年六月十四日○江原佐左衛門 全 命岳宗

延居士 八十四歳 享休二丁酉年十月二十二日○永野長

左衛門 全 光照院覺譽本哲居士 六十歳 元禄十六癸

未年六月三日○由木市左

衛門 全 心譽光西信士

七十六歳 没年月日不

記○吉川善兵衛 全 梅

岩道香居士 年齢不記

没年不記正月十三日○大



正徳
年

森勘左衛門 全 應譽壽閑信士 年齢不

記 没年不記三月十六日 ○龜田太左衛

門 全 照譽來雅居士 七

十七歳 寶永八辛卯四月十

日○長島八左衛門 全 華

岳常榮居士 七十四歳 正

徳二壬辰年七月八日○鳥海七郎兵衛 全 縁

譽即斷信士 五十歳 没年月日不記○宇田川

彌右衛門 全 鉄漢道保居士 年齢不記 享保三戊戌年八

月七日○佐藤三郎左衛門 全 了岳宗心居士 六十六歳

寶永五戊子年八月五日○大出吉兵衛 全 善林快翁信士

五十八歳 元禄十五壬辰年七月八日○近江屋勘左衛門

三



○和泉屋市郎左衛門 ○伏見屋清九郎 全○吉川屋長兵衛

右の四名の原書は没年月日法名年齢を記す

元禄七年甲戌三月徳川五代將軍綱吉公の母堂桂昌院一位尼公松雲が丹精功力を聞し召され若干金を寄附し給ふ此時羅漢十尊の彫刻成るより縁化響きの應ずる如く施財主日お月お加と積徳遂に政府に達し同八乙亥五月寺社奉行永井伊賀守管理として武藏國葛飾郡龜戸村に於て境内一千五百坪の地を給はり創めて天恩山大阿羅漢寺の號を賜ふ時お松雲行年四△



△十八出家より二十八
年猶進んで
忍耐を強く
し振つて勉
力を隆
んおし
創業よ
り茲お
十有餘

年を経て本尊丈六の釋迦佛及び五百羅漢の聖像悉く全備せり同年八月山城國宇治の黃檗五世高泉和尚さまへ東行あるを迎へて點眼の導師とし又禪師鉄眼和尚をして開山の祖とし黃檗山の末寺とある同九丙子年常陸國空間の城主牧野備後守(諱名成貞從四位侍從大夢と號す)の令閨(法号高祥院殿靈巖慈雲大姉)巨鐘を鑄て寄附せらる梵鐘の銘は弘福寺の鉄牛和尚撰述あり松雲禪師大×



×業既
お成れ
共未だ

伽藍の建築お着手あく専ら説立の企てある内寶永七庚寅年七月十一日行年六十三病て寂す出家より四十二年實わ我國の活羅漢稀世の禪僧と稱しッ可きあり

本寺舊境内の景情舊伽藍の細

圖五百大阿羅漢の尊號扁額双

聯の筆者の名梵鐘の銘文等ハ

江戸名所圖會卷の七み見え

れ心彼書と對視べて當時の莊

嚴を惟ふべし

松雲禪師化寂の後幾程も

あく正徳二壬辰年三月三

日看寺月舟も歸寂あし無

住一年その間假堂も破□



風雨 佛も 像諸 し聖 □壞

お侵され開基の精功を損せんとしたりしを

浪華在職の本師禪師深く思ひて法脈象先和

尚お命ありて同三癸巳年九月

大江戸お下向あさしめ

給ふ象先江戸お來り羅

漢寺に止り同年十一月

入院ありて是より伽藍建立の事ハ

心を盡し享保十一酉年正月十六日より日

日お府下の街市を托鉢行乞して寒暑風雪を厭とす十有餘年間勤化の事ハ心肝を碎さ

受る所の法謝米錢を積立遂お同十三戊申年お至り本殿及び東西の羅漢堂三匠堂漢門

天王殿鐘樓立關庫裡接待所お至るまで悉く建立成就せり依て寺社奉行月番へ左の願

文を差出せり



奉願口上之覺

拙寺建立餘程大造成儀御座候處
冥加至極の御事共御座
候ゆる町中托鉢の志し相募
參詣も多く近年別て建立墓
取申候ふ付丈六の釋迦佛始
め五百三十餘躰の聖像永代
風雨の難義無之様
ふ安座仕り其上宗
門肝要の座禪堂并
ふ法社無之候てハ
不相叶屋宅等段々



蒙御免候分ハ不殘輕くも成就仕
冥加ふ相叶ひ候義千万難有難筆紙
盡仕合ふ奉存候依之當八月乍忍可
奉報御國恩拈香供養の法式
執行且又十一年來月々ハ
無怠致し候志し施主の
輩々へ爲謝恩菩薩の大戒
相授總供養仕度奉願候

享保十三申年二月

羅漢寺

寺社御奉行所

羅漢寺中興象先和尙ハ黃檗四世の法孫ふして近來積徳の大善
智識あり其先出家得道の時攝州瑞龍禪寺入て三年間双手△



△の指を切ハ
十卷の華嚴經

を血書し遂に法道禪味成就して本師鉄眼禪師の命を受け普寺に住し刻苦細身の功績全く一握一投の米銭と兼合

享保二年丁酉正月より十有

二年おして本来の面目ありて

佛殿僧房悉皆く落成し同十四

年己酉二月開堂物供養の大法

會孟蘭盆の大施餓鬼會を開く

に至る此大功當寺開山と稱す

るの實も象先和尚たる事世の

許す所あるを謙遜の意深く本

師鉄眼禪師を開山とし自己の

師寶洲和尚を二代お据る又△



△松雲禪師創業の大功あるを以て一代開基と稱し自ら

二代の席お座し専ら慈善と救貧との行ひ持齋一食鹿衣を纏ひ日夜勤行の餘暇觀音の尊号と大般若經一部六百卷一字百禮してこれを書寫

す同十六年辛亥十二月廿

三日將軍徳川吉宗公羅漢

寺お入らせ給ひ象先和尚

お説法の命ありて聽聞お

り禪法微妙ある珍話を聞て歡喜をしと

謝されしとぞ同十八年癸丑十一月當寺

を榮朝和尚お譲り退去あり其後十七年を経て寛延三年

己丑六月五日七十三歳おして涅槃の大定お歸寂せり



象 先 和 尙

現住の時伽藍大半成と雖も宗門の坐禪夏冬の結制行とれざるを闕典ありとす依て後住榮朝和尚命じ元文二年丁丑の冬洞濟兩首坐を立五千指の僧を集め江湖の大會を行ふ此前享保九年甲辰十二月將軍吉宗公始めて雷寺お入らせられ同



十五年正月晚課御聽聞翌年十二月方丈お於て一坐の説法聽聞あり同十九年甲寅三千畝の地を添たまひ同二十年乙卯境内お△



△新殿を營ませられ其後御放鷹の頃ハ必ず當寺お立寄りせたまひしと

どされを舊月毎の朔日
日みの観音
懺法を修行
し十五日



大殿若經轉讀あり七月に至れば毎夕施餓鬼を修し十六廿一
五晦日みの殊み道俗群參す象先師より已來安政前まで當時の住
持ハ風雨寒暑を厭とす日々大江戸の市中を行乞すると以て勤
行とせり(以上摘要)嗚呼榮枯時あり盛衰地を換るが如きの蓋天
地の循環ふよると雖も往る安政二三の地震暴風打續く災害より
最大の禪園巍々たる佛閣麗列を亂し擔傾きてさしもの靈場漸々
お美觀を失ひ加ふるお現住三四世その人を得ず東西の羅漢堂破
毀の後榮螺堂その他の諸堂も悉く失滅して現今の荒廢信者の紅
涙を芒草の露も混するの嘆ありしむ夫常寺ハ東國の靈場おして
然も府下の名勝あり博覽尙古の今世我輩の感嘆爰おあり是再建
の意を發するの基ひなり
梵語阿羅漢華お阿羅漢ハ無學と言意ありと謂く其生死已お盡法

の學べき無く又無生とも云謂く其見思の惑を斷盡て復三界の生を受る無し云々と故
お阿羅漢ハ禪法の基の悟道の祖と崇め達磨大師本來の面目を之お因て開き空々無一
物の大悟を得たるも悉皆阿羅漢華經中の微意ありとぞ火宅の人慾一切名利を脱する
能とざるも斷然名を棄て名を得利を捨て利を得る者少しく禪機ありらざる可うとす
悟道ハ前ち羅漢の道あり近くハ紀州の自得翁(伊達千尋君)現お鳥尾得庵居士と武
門お在て禪法を修するより世の結紳と其旨趣を異おし捨華微笑退いて面壁の床お坐
し靜然として紅塵を避るふ至る此安心を収むる人必ず阿羅漢を尊信す此お於てり天
恩山の破五自羅漢の荒廢未だ全く瓦解せず茲お諸有志と諸信者漸々同心協力して
廢興の意を合お至る其發起二三の有志ハ市川三溪氏安本龜翁得門居士寺島梅幸假名
垣魯文等あり羅漢寺元來の寄附者今お子孫お傳ふる者數名加ふるお目下尙古の雅人
皆此事お左祖せり願とくハ共お計りて都下の古跡を永世お維持せんことを

○天恩山五百羅漢寺歷代和尙

開山 鉄眼老和尚 天和三年三月廿二日寂〇一代 松雲禪師 寶永七寅年七月十一日寂〇二代 寶淵和尚 享保五年十二月廿二日寂〇三代 象先和尚 寶延二己巳年六月五日寂〇四代 榮朝和尚 明和九年十月廿三日寂〇五代 春機和尚 明和元年十二月廿三日〇六代 竺鳳和尚 安永八亥八月十六日〇七代 嫩桂和尚 安永三年九月十九日〇八代 雪江和尚 安永九子二月六日〇九代 徳門和尚 明和八年九月廿一日〇十一代 雪村和尚 天明六年十二月十七日〇十二代 克明和尚 寛政十年三月十八日〇十三代 靈寶和尚 寛政二戌二月四日〇十四代 慈門和尚 寛政五丑十月十二日〇十五代 西來和尚 文化十四壬丑四月四日〇十六二十代 玄同和尚 文化十三子十二月四日〇十七十九代 湛江和尚 文化三辰七月一日 十八代 玄之和和尚 文化八未四月五日〇二十一代 壽山和尚 文化十五寅七月三十日〇二十二代 彌天和和尚 天保十一子正月五日〇二十三代 獅絃和尚 明治十一寅五月廿六日〇二十四代 現住朝比奈眉山和尚あり(畢)

○五百羅漢寺法廷の景況

伊東橋塘筆記

遠く父母の靈を吊ふる近く親友の補けあるの施主が本來の面目みして其意寂光淨土もや通せん干時明治十四年七月二十四日の我師魯文が亡親孝道祥雲居士が三十三回忌の祥月命日相當より師の本所五百羅漢寺あいて同日心外無別法の法會を執行併せて古佛像古佛器の展覽會を開けり此日や酷暑焚々如さも豫ていろは新聞紙上にて此舉を世に報じ置されば新舊の知己必ずや早朝より參場せられんと施主夫婦を始め一二の親戚その他京文社員雜賀三浦、柴山、川西、磯谷、木村、白石等逸く羅漢寺に至り陳列所の配意茶飯餅掛豆腐の擔梅も指揮を傳ふ當下施主魯叟の五分刈の軒髪身も白帷子腰も黒結の擬法衣を纏ひ所化然として諸君の來場を待つ須臾あして古佛像古佛器を携帶し禪味あ寄る遊食を腕車上あ齋し人力車夫の玉の汗の蓮葉あ置く露を欺み當寺あ來場する人々の會津會杏郎、渡邊直三郎、大野春彦、金子錦二、奥野政徳、梅堂國政、佐々木博阿彌、鈍知庵、高田某、金子吉之助、山田風外、村越総州、琴通舎

康樂、久保田彦作の諸氏にて其席久保田氏之祿子の中より抹茶器を開き玄關の片隅
 お在合の火鉢を風爐に假用し服紗捌の高手前お薄茶を立て來客が食後の飲み供した
 り従是前淺草の遊食連の元柳橋より芦葉あわらぬ一艘の傳馬船お乗組堅川通りを來
 迎佛の約われぬ施主の長老も代る沙彌の橋塘迎ひ僧と成て同橋畔の船宿海老屋にお到
 るお豫ての時刻を過らず該家お來集するもの十六擬羅漢各自名僧見立の見題の空海
 お五十嵐京鉄、遊行お椎が本才磨、元政お神田唐通、傳教お柳亭燕枝、西行お竹内久一
 兼好お石永石貞、役の小角お鈴木雅樂堂、日蓮お山下晴雨、澤庵お石原文吉、文覺お島
 山如心齋、親鸞お河合寸洲、祐天お石田喜遊、玄翁お吉田大鬼三、一体お清水晴風、法
 然お翁壽軒、天海お關根梅風、中將姫お新福本の小美津（外神田藝妓、其他幸堂得知、
 安藤廣重、岡丈紀、近藤善助、松本芳延、小林椿岳、小拾喜三郎、古山多助、小林秀次郎、
 嶋村俊明、平井由之助、海老屋の主個等此一群も便船し午前十一時船を東流し向るお
 際し船先お天蓋一流を掲げ左右お青竹を立て此お白燈を列ね恰も施餓鬼船の体お

摸し此中遊食連の各自玩弄物の太鼓、麥蕨細工の笛、鉦等を以て此を樂器お換用し奏
 樂の侶律を揃へて堅川通りを本所五ツ目の羅漢川岸迄到る間諸氏の姿の異体なると
 樂器の鳴音とお衆人競つて兩岸おイみ船中を望む者頗る多し頼て五ツ目より南岸お
 上陸するも諸氏のおは奏樂の手を止めず徐々として羅漢寺お練行さ本尊おらびも諸
 佛諸羅漢を拜禮し而して厨室お入り頼て齋しの遊食を盃梅す時は本堂お讀經修行の
 報鐘あり故も一同座を立て彼方お趣くも正面お先人の靈位を据る供物の須彌壇お
 うづ高く燈明の赫々として左右お照し施主夫婦親族有無兩縁の人々列座するとき當
 山の現住眉山和尚侍僧と供お法座お着き演淨大殿上供の修行三寶贊靈前諷經お
 おの心耳を傾け隨喜合仰の意を生せしとき虚空より花降音樂聞え紫雲綬とハ棚引
 ざれど人力車の音軋々として近く響き奇南の薫り衆鼻を穿ち急地御堂前も來降する
 者の誰を但見る紅裙風お翻へり歌舞の菩薩おあられざれば天津乙女おあらんくしと
 近く接するを親く見やるお是るん新橋屈指の歌妓三河屋幸吉、増見屋清吉、立淺見千

吉、小松屋おとり、壽賀屋おふみ、鈴木屋お貞等の六名を日蔭町の濱野屋主人が誘引したるみて清元喜和太夫之属し揚々しとして來詣せしひさあから蓮華中お櫻花を見るの想ひあり讀經了れば恭敬禮拜して一同書院お歸る後高僧お寄る遊食の兼題禪味の趣向微細ありし登時小捨喜三郎氏携帶せし土を以て遊食連が扮且し活羅漢の姿を即座お本分の土捨人形お製造し妙手お衆人感腹の外なく斯て施主の茶飯餚掛豆腐お般若湯を副へ此法會お來集せし人々知己不知己お係らず勸て以て箸を採らせ號て一禪鳴誌といふ此日午後來會の諸氏の陳列品を縦覽し涼々たる夕風を袖袂お受け土産お換へおのが隨意お歸られたり

○遊食連が調理のさまを細大記さんと思へど味お深ふして記しおさねばただ其主とせし食物をのみ記し而して當日諸君より靈前お備へられし食物さへ併て左お掲げおさつ

まふ瀧素麵(文覺)如心齋(吉野葛)小角(雅樂堂)蛤の佃煮(弘法)京餛(おす)の香物

(玄翁)大鬼三(海苔の揚物)一休(晴風)蕪菜と鱈の三杯酢(中將姫)小美津(名酒お猪口をのさね)祐天(喜達)紫蘇の千枚漬(遊行)才磨(のり巻)日蓮(晴風)おこし(やふねん)翁壽軒(どじやう汁)行基(小捨)盃洗(お玉子)兼好(石貞)お玉子十八(しんらん)寸州(荊子の鴨焼)兩行(久一)鉄鉢の中へ蓮根(隠元)の揚物を入す椿岳(無一物)九年酒(幸堂)得知(茶)きせん(吉田)大鬼三(両大師)上野廣(小畠)野屋の羊羹二掉(關根)梅風(麻禪)豆お苜を添(達磨)若延(佛餉)米(柄抄)の頭へ九年母の掛物を入る(安藤)廣重(魚板)魚形の麥落(戸)を筑へ入る(鈍智)理庵(の跋陀)羅尊者(虎屋)竹翁製(の蕎麥)饅頭(總州)菩提珠(丸)カステラを紐へ通す(琴通)舎(獅子)尾(の拂子)庄蜀黍(海老家)光明皇后(松皮)湯波(全)ふく(小性)糊椒(俊明)大燈國師(眞鐵)瓜(小林)全(大道)ざさ(の小串)久一(電光)石火(マツ)チ(新燈)社(經卷)味附(のりの角)籠を快お入しもの(義方)雲板(鉄鉢)形炭取へ餚麵を入る(柴山)

○當日出品目次

○兆殿司岩中觀音 神田○妙深不動 全○雪舟文珠 下條○鐘隨如法雲中地藏 全
○惠心僧都來迎佛 全○雪舟觀音 松濤軒○兆殿司十六善神 川上○常信達磨 栗
原○抱一灌佛 羽鳥○雪舟出山釋迦 渡邊○探幽書心經 全○光明皇后三十二佛張
込帳全○元政題目 赤松○弘法大師隅寺心經 赤松○白隱名号 全○秋月文珠 全
○文一觀音 全○養川院灌佛 全○三條西公篁法華經頌和歌卷物 全○慈鎮佛書切
全○天海僧正一心現佛一行 全○探幽佛書帖 狩野探美○玉羅漢 尾上梅幸○交
山掛真筆鷲峯圖 全○大津繪釋迦 全○古銅阿彌陀 金井田○仙涯和尚揚柳觀音
姬島竹外自寫○拂子 矢代於菟 ○青日經隆陀呬尼天 竹内久一○常信淨土双六
全○佛法双六 全○賴阿彌作西行像 全○寶曆板淨土双六 全○支那土佛 久保田
彦作 ○釋迦像 奥野○妙法貝 全○梵宇古織物 新福本小美津○鉈刻役小角 雅
樂堂○坂東順禮之札 河合寸州○觀音 翁壽軒○全吉田大鬼三○塗命天竺佛大指之
飲 畠山如心齋○千手觀音鉢 全○地藏尊錫杖 全○古銅普賢 三浦義方

○假名垣所藏之出品

○笠翁作閻魔脫衣婆の像○寶藏比丘地藏○惠心僧都辨才天○大津繪彌陀の像○臨濟
禪師畫像○粗刻羅漢像○古銅猫の香爐○百高塔○古銅達磨大師○古銅阿彌陀佛○千
年古物脫衣婆○支那古銅觀音○蕙齋筆地獄の畧畫○繪所德榮の觀世音○古作地藏尊
○七月二十四日詣本所羅漢寺遇假名垣魯文翁之法筵
雉子山園々寺下足番僧 可猫居士

如是我聞升雲師。十方有緣募檀施彫刻丈六釋迦像。文珠普賢
又副之。殊驚等身阿羅漢。五百異体妙且奇。特賜号稱天恩山五
百大阿羅漢寺。大樹公時來爲護持。爾來幾多試變易。住僧數世
守法嗣。時運流轉難能支。天地災禍無所避。天降風雨地起震。堂
塔頽破年々次。年々修繕乏資力。遂到今日及敗棄廢寺。光景故
凄憫。狐兔夜來欲求栖。迎堂蹟滅無一物。梵林草茂無東西。厭塵

壁崩春月漏。坐禪床朽秋風迷。蟻設成群弄木。蜘蛛縱吐絲縛金泥。佛是本來捨身業。彈指度衆百千劫。雖然無錢難濟度。阿彌陀光依錢燦。有衆生而有諸佛。柳綠花紅世中妙。什麼如此荒址。何府下億万多豪俠。客中魯文兄。平生好奇好古鳴。貓々退治筆鋒餘。兼記玩佛居士名。深結因緣言外妙。不座禪氣一味清。恰好當尊人年忌。設筵迎此寺繁榮。法筵則本月本日。讚佛乘中最第一。滑稽場裏般若湯。茶飯饗應波羅蜜。併開古佛鑒賞會。繡佛士質及銅質。萬古秘藏奇品顯。千年已上珍物出。怪聞門外奇妙音。飄鈍々沈々々。珍々稀代界樣姿。銅鑼鉛笛柏板琴。這是有名遊食連。贊法會呼友來臨。持寄獻立則繼々。解當隱語舍禪心。古佛遊食豈本旨。必竟遊戲菩提耳。魯兄所望在羅漢。羅漢目下居。從無下借廡。奪母屋勢。母屋貸廡俱壞毀。大厦已傾無餘材。一木收

不可撈矣。於是玩佛新法師。再企建立募檀施。拂荆棘爲布金地。芟蕪葦開阿耨池。寶臺高聳金磬響。獅座廣成幡幢垂。遙移慈嶺報佛恩。欲使衆生樂無爲。本願非一己自適。億萬蒙諸佛法澤。一紙半錢施入輩。現當二世受利益。將來往生兜率天。極樂淨土爲客。此事努々無所疑。可猫居士謹敬白。

南橋散史評 猫翁企之猫史贊之彌陀利劍不及其爪
殘夢醉士評 其人也摩訶薩其筆也波旬一飛千里韋駄天
亦難及

○京文社長魯翁。深慨羅漢寺之衰頽。奮起本寺回復之。大本願。以七月廿四日。祭亡父君。於同寺。招集朋友。饗之名曰。遊食會。使諸友人親觀本寺之形狀。以欲識名勝保存之法也。是日會者。五百餘人。奴家亦與焉。而聞

翁志也。甚嘉尙之。因用新妓歌韻賦此。以呈風韻粹先生。請先生之首唱。併議好古家諸大人。

鳥森 不如歸齋主人栗陰女史

安置佛像數五百。異狀奇態各有癖。山呼天恩寺羅漢。黃檗宗中尤別格。本尊釋迦及普賢。加之文珠稱三役。如笑如怒又如悲。有黑有青或有白。起欲舞者其手張。坐似睡者其目塞。創之者雖象先師。享保時代老任職。和尚苦心企開基。每日勸化不暫息。一錢一粒積成功。可謂碩德善智識。爾來經年百五十。今日佛德其跡匿。巍々堂宇及大破。殘瓦敗垣庭中積。羅漢腕折鼻又墜。五體全者不過百。可憐佛難保。一身空憶初時有。光澤松雲沙門五百像。廣慧國師六字額。像額依然人不存。名僧遺物千金直。腹張多音曉。蕭々虎喙々聲晚。寂々如此零落附其

儘。遂是狐狸本堂泊。玩佛居士名魯翁。聞立保存大目的。善哉善哉翁。本願是寺回復可莫謬。翁也近來怨後生。徐々初出佛同樂。祭父是孝仕佛忠。猫々足觀和尚魄。先月廿四會諸友。當日趣向他入易。會名游食携禪味。茶飯餚掛任筋着。唐辛子擬五種香。蒸玉子摸念珠。壁寄集奇客。欺羅漢。洗石古寺奈何。宰木魚腹笑和尚。痴金鴨胸燃美人。癡奇々妙々變的風。主客男女齊啞々見。忽別品出船來。普賢先生爲之斥。其員六人。幸吉小婦美。阿貞。加栗陰。七佳人是七佛敵。日本名僧古今稀。新橋尤物雅俗適。况又妙年十六強。呼女羅漢滑稽極。藝者家業佛有緣。身內相談不可默。務植善根滅罪障。永願不違未來敵。是故妾等皆嬉思。妾岡惚某亦大懼。自言吾減待合游。分三泊費供一泊。妾也某也。既如此。况有温故好古癖。名所舊跡永保存。

後人緣知先人德。名々醜金不要多。江海之大成涓滴。唯得衆多脇力資。欲保一。大伽藍迹。會日拜顏風。竊兄。故賦此詩。呈硯北。一有粹兄。添贊成。世人吃度。可承諾。請與魯翁。遂熟談。維持方法。仔細擇。此等事。頗要至急。甚嫌空敷。歲月歷。既聞日光東照宮。出金捨。賞幾萬客。又見上野本坊門。政府修理。扉再黑。可知名區。難放棄。妾雖女子。有男。就此。一件有用事。外御約束。必出席。嗚呼。堂宇門樓。重可建。羅漢舊像。難再得。世間好古諸大人。逸々乎。母爲不識。方今文明開化時。敢讓享保幕府昔。淞北云。何者。老奴爲清兒。作此達識之一大長篇。不知果成。女史之手。歟。余質之風外兄。栗陰校書。清吉之雅號也。

○題羅漢

南橋散史

善誘當年頌釋迦。跳梁殆是亞提婆。舉拳張臂三千萬。不耐方

今羅漢多。

○香語

羅漢頭陀弘介合十

識情亂業。脫婆娑三十年。々夢又多。此去西方途不遠。無心忽地觀彌陀。

○參法會賦

小見山朴堂

一味禪餐化俗裝。遊情還在談笑中。佛前生感蓮花露。紅色珠消即是空。

○今茲明治辛己夏七月念五日假名垣魯文君修先考之三十三回忌。五百羅漢寺。余得所招而倍其法。赴矣。乃賦此以易捨香之資云。雜賀豐洲。休言逝者日々疎。家吊週辰饌有魚。多謝先人餘慶澤。何圖今日及於余。

○ 追悼

三十年あまりしるぬむろしの面影も

大野春彦

そゝぐ手向の水あううべり

○

あひがさ御法のよひも長き日も

額 翁

くれんさうりあ成しやいささ

五百大あうらん堂の再建あ

松本芳延

あゝ肌ぬぎて施主あこそつけ

あき家尊のさめあ片肌ぬがれし

花 時

あうらんずべき事あこそあれ

家尊のうしあ似る佛も拜したり

琴 通 舍

今日羅漢寺の法のむしろあ

古びたる五百羅漢や風うをる

柴山 榎 枝

鼓子花や心ありけあ咲きどころ

西阿彌五雀

それもく涼しき形や活羅漢

かゝるじく

高みづあ産ごあ高し咽喉ばとけ

幸 堂 得 知

○ 遊喰連船中漫吟

饅頭あ問答をする船どまり

荒川舟長吉

けんのみを喰ふ小僧が後をと

石 田 春 蓬

殺生をやぶりごういで魚を釣り

翁 壽 計

問答を手ぶりあ頼む米市場

外 神 田 車 仁

廻り行く法のむしろあ榮螺堂

元 柳 橋 梅 老 屋

進めしや極樂界も眼のあうり

新 福 本 小 美 津

鳴一誌禪

遊戯菩提記終

ねふけさす中の菩薩の腹さもり
積もの、押の五輪のとあれもの
木食の魚板の音お用もあし
法の座を退さ羅漢の涼みあさ

竹内久一
吉田大鬼三
石永石貞
河合寸洲

明治十四年十二月十七日御届 同年同月十八日出版

定價金拾錢

編輯人兼

伊東專三

東京府平民

印刷

東京橋區竹川町

壹丁目五番地

發賣所

横濱辨天通四丁目
東京元大坂町十一番地

守屋正造
法木徳兵衛

